**『世界俳句２０２０　第１６号』の俳句に寄せて**

 岩脇リーベル豊美

２０２０年４月２９日に予定されていた第１５回世界俳句協会日本総会と第９回世界俳句セミナーが中止となり、セミナーはオンラインで行なわれると、理事長の夏石番矢（以下敬称略）から連絡を受けた。世界中どこでも手紙や小包が受け取れるはずの郵便網も入管システムも、飛行機が飛ばなければ機能せず、『世界俳句２０２０　第１６号』も現在手元には届いていないが（２０２０年４月末現在）、夏石番矢がすべての海外俳人に当該号のPDF版をメールにて送付してくださり、そのツールで世界俳句全句を拝読できることに感謝する。ただこのウイルスの蔓延は、基本権、自由権を奪っているものとして、それにも増して、世界俳句協会定款の第三条「多くの異なる人種・宗教・性・国・経済・政治についての背景を持つ俳人が、先入観や検閲なしに出版できる場を提供すること」を脅かす事態であることを認識せざるを得ない。と同時に、その約束を守るべく措置を講ずる俳句世界に思いをいたすのである。

世界俳句の俳人のみならず、地球上の全人間が、新型コロナウィルス感染による危機的状況、それに基づく外出禁止や自由の制限を憂いていることだろう。昨年の今頃が幻影のようだと追想するばかりか、昨年９月に東京で開催された第１０回世界俳句大会でも予測すらしなかった世界の激変を思うことだろう。私はそれ以前、以降もドイツにいて、平成時代の時系列をはっきり記憶できていなかったものの、災害の多発した時代だった、令和という時代が素晴らしい（とまでいかなくても）佳き改元になることを遠巻きに祈願もし、授業でも言及したりしていた。

国境を超えることがさほど煩瑣ではなくなり、それにともない国民国家が個々では存続可能ではなくなっていた現今、それは「人類」という構想を検証する意味では不可欠であっても、「世界」とは、何と脆弱な（形而上学的）共同体理念なのだろうと痛感するとともに、人間「世界」の表面的取り決めのはかなさを思う。世界俳句の俳人はこのコロナ禍以前、すでにこの視点を持ち、詩的に詠んでいるのだ。

『世界俳句２０２０　第１６号』には２０１９年５月までに詠まれたであろう、４６か国３４言語１６８人の俳人からの５０３俳句が収められている。その空間軸の拡がりには驚かされるが、時間軸も、１９２０年代出生の俳人から今世紀生まれの俳人まで綿々と続いている。年代背景の相違にかかわらず、いずれの俳人の眼にも、世界内に存在する自己が再帰的に発見され、その驚嘆、その痛みという共通の主題が表現される。それが闘争であれ、訣別であれ、死であれ、孤独であれ、生の瞬間々々に湧き出づる自らの感受を投影している、

三叉路で迷う／濃霧、高い海／われらどちらへ？

 ディン・ニャットハイン（１９２８年生まれ）ベトナム　２１頁

翌年の桜　知る由もなく

 伊丹三樹彦（１９２０～２０１９年）日本　３０頁

山遥か今朝も我待つ同じよう

 呉　瞈望（１９３０年生まれ）台湾　４１頁

私たちの感情／さよならなしに去った／凍った

 リリアナ・ライチェヴァ（１９３０年生まれ）ブルガリア　４７頁

彼は死んだ／わたしはロザリオと／振り子時計とともに残される

 アニツァ・ゲチッチ（１９３１年生まれ）クロアチア　２４頁

家を出ると／一万の些細なこと／私に落ちてくる

 カジミーロ・ド・ブリト－（１９３８年生まれ）ポルトガル　１９頁

ほぼ一世紀の時間軸の幅がみられるが、それはその途上においても先に向けて伸びており、人間世界における経験と句詠の間には苦悩という相関が見られることも事実である。なべて美しいもの、好むものに目をむけながらも、痛み、苦としての存在を看取する、

秋の葉／祖母より／序言を受ける

 エセ・ツシェフレリ（２００６年生まれ）トルコ　１６頁

君を独り占めしたいたびに喉詰まる

 フフハダ・ブフマンダ（１９８４年生まれ）内モンゴル　１４頁

母の写真を／僕の手つよくさわる／狼たちが見つめてる

 マルチェル・ドモンコシ（１９８２年生まれ）ハンガリー　２０頁

パンジーはさよならがない街に咲く

 乾　佐伎（１９９０年生まれ）日本　２９頁

にんげんとめどなく夏の醜い河を

 梶原由紀（１９８７年生まれ）日本　３１頁

一回性の情事の街のメリーゴーランド

 奈良拓也（１９９７年生まれ）日本　第三回世界俳句協会俳句コンテスト６８頁

花束いっぱいのこの世で／私はひとりぼっちの花／どうしてか言えない

 アイリッシュ・D・トーレス（１９９５年生まれ）フィリッピン　５６頁

空間軸と言ってよいならば、世界俳句には政治的、文化的経験値の比較しようもない諸世界の俳句が繰り広げられている。自由主義の歴史はそれほど古いものではないが、直近に紛争を経験した、もしくは、経験している俳人のもつ批判性が、ある読み手にとっては未知である世界を想定可能にする。自己と他者の深淵を句が埋めているようである、

小麦畑に落ちる／一包みの光／収穫者にむさぼり食われる

 ムルコ・アフマド（１９７４年生まれ）イラク　８頁

難民キャンプ／フライパン一つで料理／豚肉と牛肉

 バフティヤール・アミニ（１９７５年生まれ）タジキスタン・ドイツ　９頁

シリアからのニュース／片足負傷の鳩／バルコニーに

 ゾラン・ドデロヴィッチ（１９６０年生まれ）セルビア　２０頁

世界／深い森／不正

 ラヒム・カリム（１９６０年生まれ）キルギスタン　３１頁

沖縄を人質にして五月晴れ

 紅玉夏生（１９５０年生まれ）日本　３３頁

朝の北風／少年時代の葉っぱに満ちた／この窓

 アーシュラフル・ムーサデック（１９５８年生まれ）バングラデシュ　３８頁

戦火／焦げた匂い／仲間の人々

 グエン・ヴァンロン（１９３７年生まれ）ベトナム　４３頁

死者とともに／すべてのよきもの沈む、ただ彼の恐怖／世界中さまよう

 ゴルダナ・ラドヴァノヴィッチ（１９６３年生まれ）ボスニア・ヘルツェゴヴィナ ４７頁

鷹が大地に軽く降り立つ愛の重さ

 P・ツォグトナラン（１９６０年生まれ）内モンゴル　５７頁

戦争で荒廃／日が出ても／遅すぎる

 ニール・ホィットマン（１９４８年生まれ）米国　６０頁

我ら同じ源なれど／不幸なる戦あり／同じ源なのに

 徐　依苹（１９５１年生まれ）中国　６１頁

ボートピープル／波に波／踊る月

 ロマーノ・ゼラスキ（１９４７年生まれ）イタリア

世界俳句はそれでも痛みの一点にはとどまってはいない。俳句の主体性は苦悩から発して、憧憬および希望へと向かう、というよりもそこに内在している。世界内の俳人そのものが憧憬および希望なのであろう。それが今号の英文和文の扉に俳画で描かれていると思う。英文の扉には、清水国治の俳画構成で、ネパールのラム・クマール・パンデイの一句が掲げられている、

毎金曜日／からの大洋満たそうと／塔が倒れる

 ラム・クマール・パンデイ（１９６４年生まれ）ネパール

和文の扉では、アブドゥルカリーム・カシッドの句とビル窓の清掃者の写真に希望の空を思わせる、

今朝／青い服の天使たち／天を洗った

 アブドゥルカリーム・カシッド（１９４６年生まれ）イラク